



Where inspiration meets ～日本とアジアのビジネスをつなぐ沖縄で“ひらめき”と出会う～



2017年を「沖縄MICE“躍進”元年」と位置付ける沖縄では、今後10年間の政策指針となる「沖縄MICE振興戦略」を策定。これに基づきMICE誘致から開催まで、沖縄MICEを戦略的に牽引する中核組織として、産学官連携による「沖縄MICEネットワーク」を設立させた。ここでは主催者の多様なニーズに応えるために協働するプロフェッショナルなTEAM OKINAWAづくりが進められている。

そして今、国内随一のリゾート地としての基盤を活かしながらビジネス交流拠点としての「沖縄」が提供する価値、つまり主催者の課題を解決し、MICEの開催目的をより高い次元で実現するデスティネーション「OKINAWA」を象徴する沖縄MICEブランドが発表された。

急激な経済成長を遂げるアジア諸国にあって、空路4時間圏内に人口20億人の市場を擁する東アジア・東南アジアの中心に位置する「沖縄」。リゾートアイランドとしてのイメージが強い沖縄県だが、今、英語を公用語に世界最高水準の科学技術に関する研究及び教育を行う沖縄科学技術大学院大学(OIST)をはじめ、学術・研究を含むアジアのビジネスハブとしての一面に注目が集まっている。

沖縄県は、好調な観光分野をはじめ、発展するアジア市場を取り込む千載一遇のチャンスと捉え、

- 1) アジアをつなぐ、国際競争力のある物流拠点の形成
 - 2) 世界水準の観光リゾート地の実現
 - 3) 航空関連産業クラスターの形成
 - 4) アジア有数の国際情報通信拠点“スマートハブ”の形成
 - 5) 沖縄からアジアへとつながる新たなものづくり産業の推進
- を重点戦略に掲げる「沖縄県アジア経済戦略構想」を推進。また、農林水畜産業、先端医療・健康・バイオ産業、環境・エネルギー産業、地場産業・地域基盤産業の4つの産業についてもアジア市場を取り込んだ成長戦略を掲げ、さまざまな施策を展開中だ。

このような中、入域観光客数がハワイを上回った沖縄の勢いを見込んだホテル事業者が、沖縄本島、石垣島、宮古島を中心に投資を活発化させている。さらにここ1～2年、中城湾港新港地区工業団地には総合物流センター、道路貨物運送業、建設機械卸売業、医療機器、自動車部品製造業、バイオマス発電など物流や高度技術分野の企業の進出がめざましく、沖縄の地理的優位性や発展可能性を見据えて多様な企業が沖縄への投資を始めているのだ。



進化するビジネス環境

アジア各地と週200便以上の直行便が往来する那覇空港では、2020年3月に完成予定の第2滑走路のほか、国内線と国際線ビルを連結するターミナル整備も進められている。また、日本とアジア主要都市をスピーディに結ぶ国際物流ハブとしても機能している。2018年には空港内に航空機整備施設を整備し、航空関連企業の集積も進行中だ。那覇港では2018年度に那覇港総合物流センターが整備され、クルーズ船第2バースの整備も予定されるなど、沖縄県における国際交流・物流機能は着実に強化されている。

空港からのアクセスでは、2018年3月には沖縄本島西海岸をつなぐ浦添北道路が開通したことで、空港から沖縄コンベンションセンターまでの所要時間は約20分へ短縮されたほか、2019年開業予定のモノレール延長事業をはじめ、複数の国道バイパス整備や那覇空港自動車道延長整備が進められているなど、課題とされてきた交通の利便性改善が図られている。

MICEは第2ステージへ

沖縄県のめざす「日本とアジアつなぐビジネスの架け橋」としての機能を補完するのが「MICE」だ。沖縄県では2000年の九州・沖縄サミットを契機に、MICEの誘致に積極的に取り組み、2016年は1,177件のMICEが開催されるなど、MICE開催地としての実績を着実に積み重ねてきた。そして今、沖縄県ではこれまで施設の制約により機会を損失してきた大型展示会や国際的な学会会議等を開催し、ビジネスや学術の交流拠点としての機能強化を図ろうと、沖縄本島東海岸の中城湾港マリンタウン地区に3万㎡の展示場を備える大型MICE施設整備を予定している。経済界や県民の期待が高まる中、既に、同施設の利用意向を示す展示会主催者やイベント事業者との協議が進められている。沖縄県では大型MICE施設を核として、東海岸活性化の起爆剤とする戦略的な施策を展開する考えだ。こうした動きの中で、2018年1月には、台湾貿易センター（TAITRA）とMICE分野に関するMOUを締結。TAITRAの展示会運営ノウハウやMICE主催者とのネットワークの活用を進めるなど、MICEデスティネーションとしての沖縄は新たなステージを



海外14カ国から260人が参加した情報系国際会議でのユニークベニューパーティーの様子。ユニークベニュー開発が進む沖縄では、非日常空間で記憶に起こる交流機会を提供する。

迎えようとしている。

沖縄には、誰もが知る「青い海、青い空、輝く太陽」がある。国内随一のリゾートを楽しみながら、東京、ニューヨーク、パリでも実現できない「ビジネス交流」、「ビジネス成果」を実現するMICEデスティネーションが沖縄だ。なぜ、他都市ではできない「ビジネス交流」、「成果」が得られるのか？

その一つが、融合の歴史・文化の中で多様な価値観を受容してきた沖縄には、訪れる全ての人を受け入れるオープンマインドな万国津梁の思想が受け継がれているからだ。

また豊かな生態系を有する沖縄の自然は、参加者を非日常の空間へ誘い、その心や感性を磨く。これにより沖縄では、新たな価値創造が湧き起こるのだ。さらにアジアと日本のビジネスをつなぐ都市機能・産業基盤の進化、海洋性・亜熱帯・島嶼型の先進課題研究の集積が、ビジネスを進化・加速させている。

このようにビジネスのオンとオフのバランスが良い沖縄では、「他の開催地より参加者が増える」という。実際に、MICEへの参加を機に、沖縄への投資を検討する企業も出てきた。国を、人を、英知をつなぎ「ひらめきや創造性」に出会える沖縄でのMICEは、ビジネスの未来を拓く特別な体験を提供してくれるだろう。

沖縄MICEブランドロゴについて

「対話」を起点に湧き出すひらめきや紡がれたアイデアが「新たな価値」を創造する姿を、沖縄の海をイメージした色で描かれた吹き出し。MICE参加者のインスピレーションをグローバルに発展させる沖縄の島々をシンボリックに表された4つの吹き出しが印象的な沖縄MICEブランドロゴ。

【タグライン】

ひらめきと出会う「Where inspiration meets」のタグラインには、「ひらめきや創造性を与える場所であることを提起」というメッセージが込められている。

【ブランドストーリー】

日本にありながら独自の歴史、文化、自然環境を持つ沖縄には、全ての人、あらゆる垣根を越えた交流と融合が生まれ、琉球の時代から今日へ、その繁栄を支えてきた万国津梁の精神が受け継がれています。

国を、人を、英知を、そしてビジネスを繋ぐ沖縄は、未来を拓き、変化させる結節点となります。

アジアを代表するリゾート環境を備えたビジネス都市“沖縄”での特別な体験が、明日に向けてのエネルギーをチャージし、大海のように広がるインスピレーションを湧き起こします。

21世紀のアジア発展の架け橋として進化し続ける沖縄のビジネス環境は、生み出された「価値」を未来へと繋ぎます。

学术交流の目的地としても魅力的な「沖縄」

東京農工大学 大学院農学研究院 動物生命科学部門 獣医解剖研究室 **金田 正弘 氏**

昨年9月に開催した「Fourth World Congress of Reproductive Biology (WCRB2017)」は、家畜やヒトを含めた哺乳類の生殖科学・繁殖学分野の第一線の研究者が世界各国より集い、最新の研究成果についての発表・議論を行う国際会議です。これまでハワイ、ケアンズ、エジンバラで開催され、第4回の開催はアジア諸国からのアクセスの良さや多彩な支援が決め手となり、アジア初となる沖縄での開催となりました。

当初500名を見込んだ参加者は、沖縄の魅力や若手研究者・学生への参加費・渡航費用の助成もあり、海外32カ国から約400名を含む約800名と、当初の予想、過去3回の大会参加者数を大幅に上回りました。参加者の大幅増にもかかわらず、盛況利にまた大変高評価をいただいて無事に閉幕できたこと

に安堵しています。

チャーターバス支援や芸能アトラクションの派遣など、参加者の快適性、また満足度を高める多様なご支援も大いに役立ちましたが、MICE視察支援で2回、会場予定地を含む事前視察ができたことが非常に参考になり、重要だと感じました。

国内外からの参加者にとって沖縄での学会開催は非常に魅力的で、参加者として一度でも沖縄での学会に参加すれば、主催する立場になった時に候補として上げたいと思います。

今回の成功は、今後の学会の発展に大きく寄与する成果を上げましたが、今後はより多くの方に、観光のみならず学术交流を目的として沖縄を訪れていただきたいと思っています。



参加者の絆を深め、さらなる発展を誓った開催地「沖縄」

オール日本スーパーマーケット協会 (AJS) 会長 **田尻 一 氏**

オール日本スーパーマーケット協会 (AJS) は1962年の創立以来、地域のお客様の食卓を支える“熱い志”を持った会員スーパーマーケットが、時代に適応した“本格的スーパーマーケットづくり”を共通理念に活動を展開してきました。

昨年11月、“絆”をテーマに開催した「AJS創立55周年記念沖縄大会」には、予想を大きく上回る約1,000人の皆様にご参加を頂きました。これは、開催地が「沖縄」であったことの効果だと感じています。

全国のスーパーマーケットや食品メーカーなどのトップの皆様が集まった大会の初日は、日本初の地方開催サミット会場「万国津梁館」での特別講演に始まり、沖縄美ら海水族館を貸切り壮観な大水槽をバックに、琉球舞踊などのアトラクションを通じて沖縄文化に触れていただくウェル

カムパーティを開催致しました。2日目、3日の日中は沖縄の自然・歴史、海、世界遺産「首里城」をテーマにした観光ツアーやゴルフで沖縄を楽しんでいただきました。

2日目の夕刻からは大会のメインイベントとしてザ・ブセナテラスのプールを特設会場に記念パーティを実施。沖縄を代表するバンドBEGIN様を招いたスペシャルライブのほか、沖縄名産・特産品と参加者をつなぐ地元メーカー協賛ブースも展開致しました。550発の花火を打ち上げたフィナーレでは、非日常体験の中で揺さぶられた参加者の皆様の魂が一つになりました。このように相互扶助を表す方言“ゆいま〜”の精神が息づく3日間の沖縄ならではの体験はグループの絆を深め、さらなる発展へとつなげることができたと感じています。



活発な国際交流を実現し、「また沖縄で開催したい」の声

中部大学工学部機械工学科 教授 **鈴木 浩文 氏**

昨年12月に開催した「第20回国際最先端加工シンポジウム (ISAAT)」は、砥粒 (研磨剤) 加工に関する国際会議です。砥粒加工は人類が歴史を残しはじめた5000年前から人類の生活の向上に関与し、現代ではカメラやスマートフォンのレンズ、先端の半導体の超精密加工などにも応用され、最先端技術の発展に不可欠な技術です。

沖縄で開催した第20回の記念の大会には過去最大規模の239名が参加し、151件の論文が寄せられました。例年は総参加者が100～150名の本大会ですが、今回は中国、台湾、ドイツ、オーストラリアなど、世界から約150名の外国人参加者を得ることができました。これは、開催地が沖縄であったことにはかなりません。

また、沖縄が経済特区であることがわかり、会社の製造

部門を移設することを検討されている参加企業様もあります。実際に現地でも工業団地の視察ができたことも、成果につながったと思います。

ビーチでのウエルカムレセプション、沖縄科学技術大学院 (OIST) 様での研究発表、万国津梁館における琉球太鼓や琉球獅子の演舞を交えた沖縄文化に触れながらのバンケット。またOISTでのテクニカルツアーや、体験も可能な沖縄工芸村の琉球ガラス工房訪問。そのいずれも、海外のお客様から例年以上に高評価を得ることができ、活発な国際交流を実現することができ、他の機械工学系の国際会議でも、「沖縄で開催したい」という話があると、参加者から漏れ聞き及んでいます。

